

\* 「十九世紀後半から二十世紀にかけてヨーロッパの作家達が直面したものはなにかといへば、それは、自然に對して人間の自主性を奪取せんとした科學の實證精神が、そのあくなき切先を人間性そのもの、自我そのものにさしむけたところに明瞭な姿を見せることとなつたエゴイズムにほかならなかつた」(中略)「ヨーロッパの近代作家たちは自然の法則を發見したとおなじやうに自我の必然を發見したのであつたが、それゆゑに自然に對すると同様に、**自我の必然に、己がエゴイズムに果敢な闘争を開始し、それを攻略せんところ**みてゐる。リアリズムはそのための武器であり、外形の無關心さにもかかはらず、その底には激しい社會的な文化意思が隠されてゐたのである」(「近代日本文學の系譜」P21)

**A:**「(西歐)十九世紀後半の自然主義作家にとって、資本主義社會(A)は彼等の自我(A')を實生活(A)において拒絶し扼殺するほどに墮落し硬化したのであり、しかもこの社會(A)的事實を彼等ははつきり凝視し、さらにこれを自己(A')のものとして——いはば社會(A)の醜惡と痼疾とを自己(A')のそれとして(A=A'として:即ちAの醜惡と痼疾、墮落と硬化を自己の「エゴイズムと虚榮と俗惡とのかたまり」P20として)受け容れたのであつた。またそれゆゑの厳しい自己否定(B⇒C:理想人間像)でもあつた。彼等の自我(A')はもはや作品(B)以外に主張と正當化との場所(B⇒C:理想人間像)を見いだしえなかつたのである」(P19)。

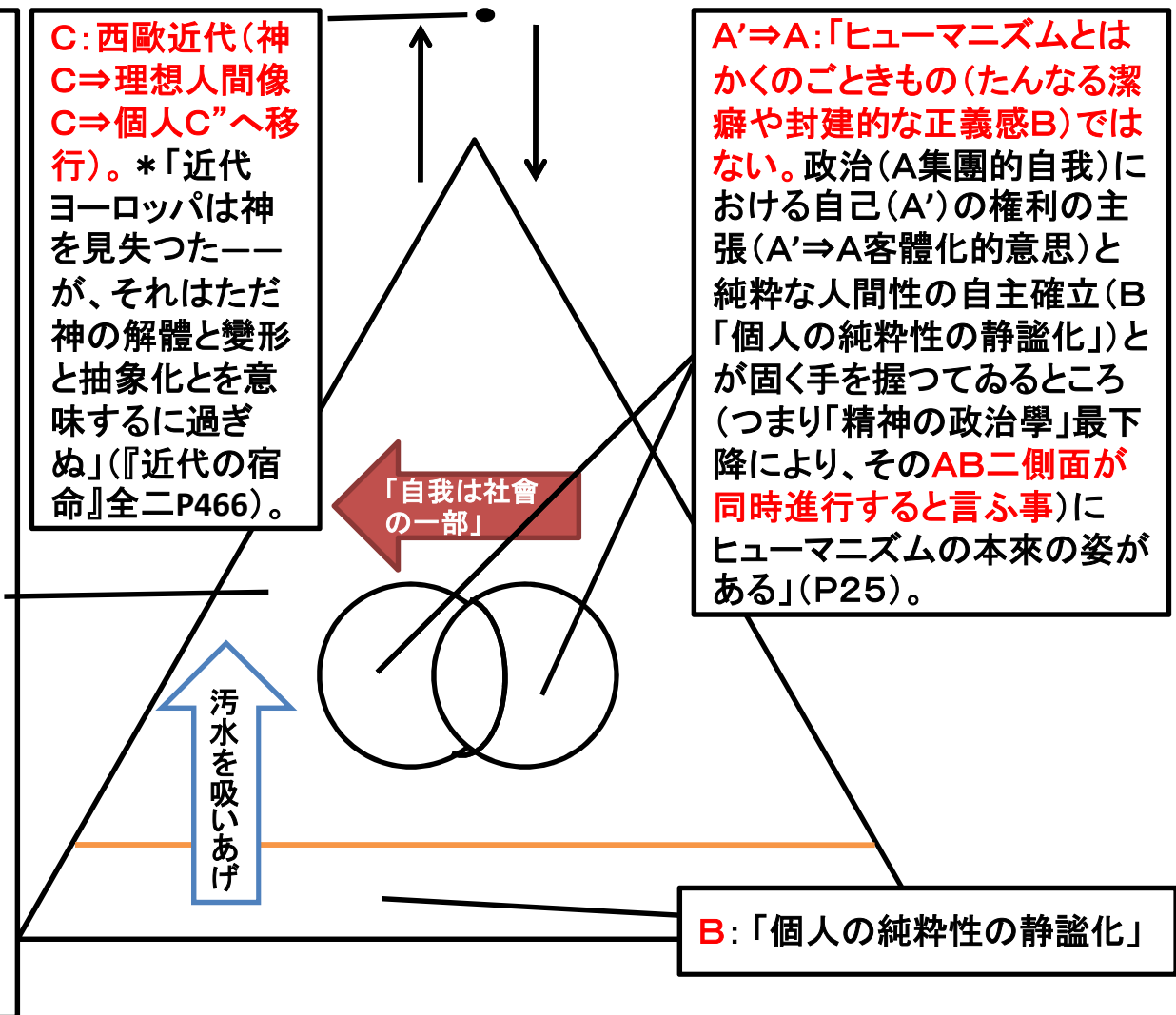
**C:**西歐近代(神  
C⇒理想人間像  
C⇒個人C"へ移行)。  
\*「近代ヨーロッパは神を見失つた——が、それはただ神の解體と變形と抽象化とを意味するに過ぎぬ」(『近代の宿命』全二P466)。

**A'⇒A:**「ヒューマニズムとはかくのごときもの(たんなる潔癖や封建的な正義感B)ではない。政治(A集團的自我)における自己(A')の権利の主張(A'⇒A客體化的意思)と純粹な人間性の自主確立(B「個人の純粹性の静謐化」)とが固く手を握つてゐるところ(つまり「精神の政治學」最下降により、その**AB二側面が同時進行する**と言ふ事)にヒューマニズムの本來の姿がある」(P25)。

**B:**「個人の純粹性の静謐化」

汚水を吸いあげ

「自我は社會の一部」



〔心理主義：西歐近代①②と漱石「彼我の差」〕（『近代日本文学の系譜』より）

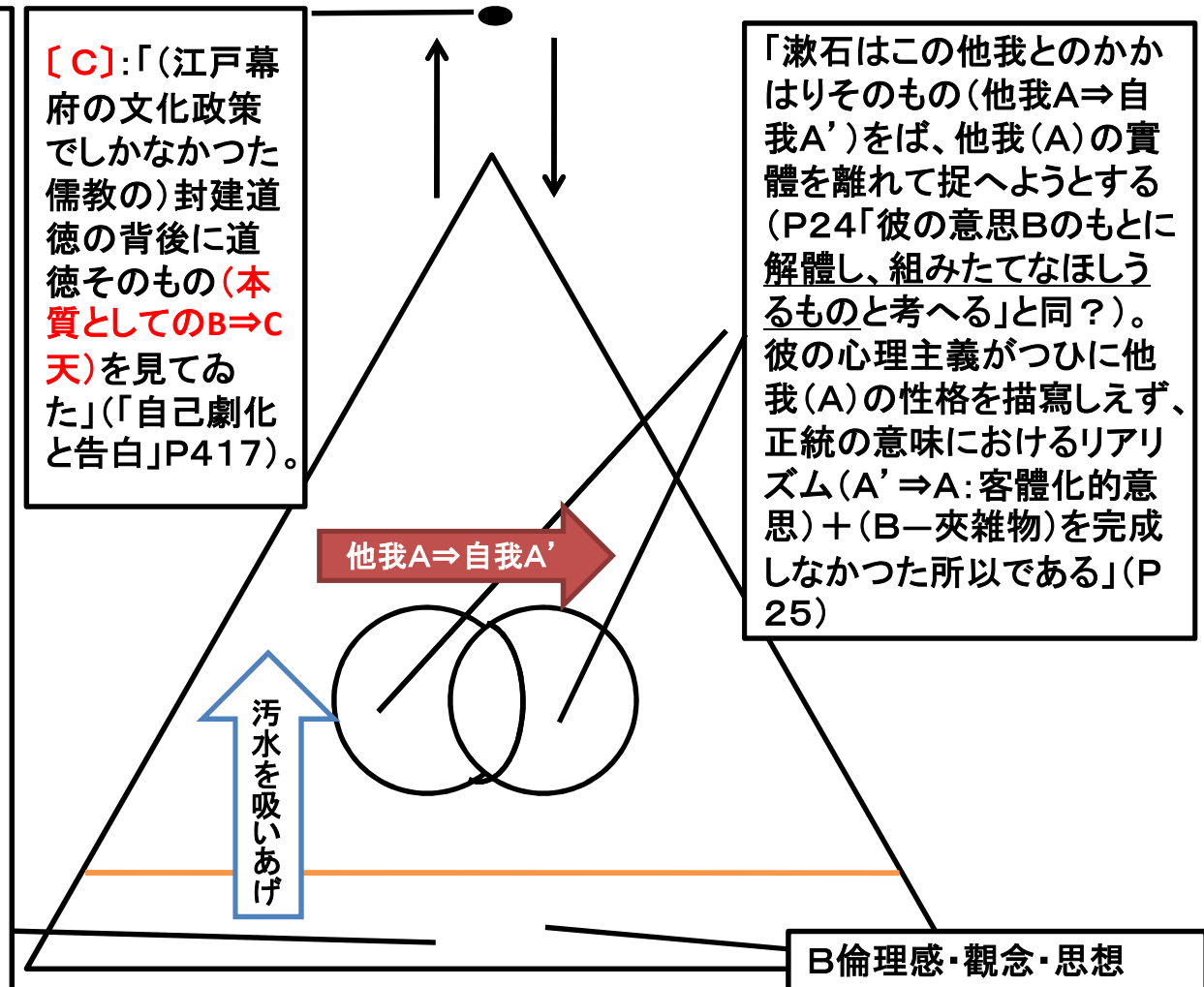
①ヒューマニズム（否定因C）＝（A' ⇒ A：客體化的意思）＋（B—夾雜物）。

②フローベール（理想人間像C）＝（A' ⇒ A：客體化的意思）＋（B—夾雜物）。つまり、ヒューマニズムは（否定因C）を根柢に持つと同じく、フローベールも（理想人間像＝否定因C）を根柢に持つてゐるのだと。

③漱石（「封建道德の背後にある道德そのもの」否定因C）＝（他我A⇒自我・エゴイズムA' にかかはらせる）÷（倫理感B・觀念B・思想Bで對立する）。⇒つまり「エゴイズム(A')」を彼の意思(B)のもとに解體し、組みたてなほし⇒（右を到達せんと意思）⇒自我の純粹性（B『個人の純粹性の静謐』）の捕捉

「漱石はその觀念的明確さ(B倫理感・思想)をもつて自我(A')の現實にエゴイズムといふ輪郭を刻みつけ(即ち③の方法で)、その線のかなたに(「精神の政治學」線の最下降に)自我の純粹性(B「個人の純粹性の静謐」)を信じつつ、そこへ到達せんと意思したのである。(中略)漱石は心理主義といふ道具(③の方法)をもつて刻まうとした。鷗外(「素材Aの必然に随ひ歩む」：A' ⇒ A)とは對蹠的(正反對)に、漱石は架空(B倫理感・觀念・思想)を頼らねばならなかつた。彼のフィクション(心理主義：③の方法)は、この意味において、彼の觀念(B倫理感・思想)が到達せんと意思する自我の純粹性(B「個人の純粹性の静謐」)を周圍から指示し暗示せんがために必要なものとして、他我とのかかはり(他我A⇒自我・エゴイズムA' にかかはらせる)を織り上げ、解きほごす(解體・組みたてなほす)作業にほかならなかつた」(P26)。

〔C〕：「(江戸幕府の文化政策でしかなかつた儒教の)封建道德の背後に道德そのもの(本質としてのB⇒C天)を見てゐた」(「自己劇化と告白」P417)。



「漱石はこの他我とのかかはりそのもの(他我A⇒自我A')をば、他我(A)の實體を離れて捉へようとする(P24「彼の意味Bのもとに解體し、組みたてなほするものと考え」同?)。彼の心理主義がつひに他我(A)の性格を描寫しえず、正統の意味におけるリアリズム(A' ⇒ A：客體化的意思)＋(B—夾雜物)を完成しなかつた所以である」(P25)